

コレクションの多様性に関する評価指標と適用可能性の検討

武田 千佳

近年、持続可能な開発目標（SDGs）にみられるように“多様性”が重要視される中、図書館においても様々な多様性が取り沙汰されている。図書館資料はLGBTQ+のような資料内容、出版・頒布形態など資料の形式というように、多角的に多様性が語られている。図書館収集方針には多様な資料を収集しようとする姿勢が現れている一方、コレクション全体の多様性を評価しようとした研究は少ない。本研究では、生物多様性評価指標を基に定式化された学際性評価指標を援用し主題に基づいて図書館の多様性を評価する指標を作成し、資料冊数や異なり分類記号数といった図書館がすでに収集している統計データによる多様性評価と比較して検討を行った。

日本十進分類法（NDC）に基づく分類記号を主題として扱い、国立国会図書館サーチをクローリングして収集したNDCと所蔵冊数の組をデータとして用いた。データの収集対象となる図書館は国立国会図書館総合目録ネットワークにデータ提供を行っている都道府県立図書館のうちの53館とした。ここでは、データを数え上げた値を「実測値」と定義した。蔵書冊数（本研究では、“コレクション数”と呼称する）、異なり分類記号数（実測値の異なり分類記号数）の2つを実測値として用いた。実測値を多様性評価指標の式に代入することで得られる出力値を「指標値」と定義した。Simpson指数（Simpson）、Rao-Stirling多様性指標（RS）、DIVの3つの学際性評価指標を援用して多様性評価指標の式とした。さらに資料収集方針に従って多様な資料を収集しているかを実測値や指標値が表すことができているか検討するために都道府県立図書館収集方針の文言から集計・計算した値を「理想値」と定義した。資料選定の具体的な基準となる選定基準に類するものを対象とし、方針に記載のあった異なり主題数、異なり分類記号数（理想値の異なり分類記号数）、および収集の程度に応じた7段階の点数の3つを理想値として用いた。

実測値と指標値のどちらがより選定基準を反映しているか両側1%水準で検定した結果、実測値はコレクション数、異なり分類記号数のいずれも理想値（異なり主題数、異なり分類記号数、点数）と有意でなかった。指標値はSimpson、RS、DIVのいずれも理想値の異なり分類記号数と有意であり、DIVは理想値の異なり主題数とも有意であった。相関係数を比較した結果、理想値の異なり主題数（コレクション数： $r=.050$ 、異なり分類記号数： $r=.154$ 、Simpson： $r=.202$ 、RS： $r=.206$ 、DIV： $r=.274$ ）、異なり分類記号数（コレクション数： $r=.052$ 、異なり分類記号数： $r=.229$ 、Simpson： $r=.304$ 、RS： $r=.312$ 、DIV： $r=.405$ ）、点数（コレクション数： $r=.073$ 、異なり分類記号数： $r=.092$ 、Simpson： $r=.186$ 、RS： $r=.145$ 、DIV： $r=.228$ ）のいずれと比較した場合でも実測値より指標値の方が高かった。したがって、指標に従って多様な収集を行っているか評価する際には、評価指標の方が適していると考えられる。

（指導教員 池内淳）